

島田第一中学校3年 宮崎 心音

皆さんは「盲導犬」と聞いてどのようなイメージを抱きますか。「お仕事をしている犬」「視覚障害者のパートナー」のようなイメージを抱くと思います。しかし中には、「可哀想な犬」「ストレスをたくさん抱えている犬」などマイナスなイメージを抱く人も多くいます。

今、私はパピーウォーカーとして一匹のラブラドルの子犬を家族で育てています。パピーウォーカーとは、将来盲導犬になる可能性のある子犬を、盲導犬協会などの委託を受けて家庭で預かり、生後二か月齢から一歳前後までの約十か月間、人と一緒に安心して過ごすための関係づくりと家庭でのルールを教えるボランティアのことです。パピーは普通のペットとは違うため、普段の生活の中でも多くの制限がありました。例えば、ご飯も決まった種類だけ、市販で売っているようなおやつはどんなに可愛くてもあげることができません。また、散歩中に他の犬と関わることやドッグランに行くこともできません。しかし、パピーウォーカーをやってよかったこともたくさんあります。なんといっても可愛いパピーと一緒に暮らせることです。また、しぐさや表情はもちろん、イタズラを含めてその存在すべてが愛おしくてたまらないことです。ただ、隣りに座って頭を撫でるだけでとっても幸せそうな顔をしてくれたり、おもちゃを出して引っ張りっこをするといつも尻尾をぶんぶんふって全力で遊んでくれます。パピーと生活するようになったことで、毎日の生活に楽しみができ、私は前向きになることができました。

パピーウォーキングをしていると担当の方に、すべての犬が必ず盲導犬になれるわけではないことを教えてもらいました。実際に盲導犬としてお仕事をするのは約四割、残りの六割は別の道に進みます。

「盲導犬になれなかった犬はだめな犬」と思う人もいるでしょう。そんな事はありません。人にも向き不向きがあるように、その子は盲導犬というお仕事に向かなかっただけなのです。別の道に進んだ子たちは「キャリアチェンジ犬」といってまた別の新しい家族と一緒に暮らしていきます。盲導犬になった子は約八年間ユーザーさんと一緒に暮らし、たくさんの愛情をユーザーさんや家族の人からもらいます。実際に、ユーザーさんのお話を聞く機会がありました。その時、一緒にいた盲導犬はすごく楽しそうに家族含めて幸せそうでした。盲導犬は常に完璧ではなく、時には人間の子供のようにイタズラをすることもあつそうです。盲導犬としての仕事を果たしたらハーネルを外し、家庭犬のように甘えたりおもちゃで遊んだりします。盲導犬を引退したあとは、引退犬としてボランティアの家族の一員として新しい生活を楽しみます。長時間お留守番することがないので、たくさんの愛情をもらって生活しています。このように、盲導犬になった子もキャリアチェンジした子もたくさん愛されています。

盲導犬はいつでもどこでも一緒にいられるのが本当に幸せなのです。盲導犬は決して可哀想な犬ではありません。盲導犬になった子と別の道に進んだ子も全員が幸せな道を歩んでいるのですから。

進化する人類、退化する人間

島田第一中学校 3年 遠藤 光湊

現在、対話型 AI が急速に成長している。多くの企業が開発に着手しており、これからも対話型 AI の成長は加速していくと予想できる。僕も対話型 AI を使ったことがあるが非常に自然な日本語で会話できて、技術の進歩にとっても驚いたことを覚えている。

技術が進歩することは良いことだが、僕は考えられる一つの可能性に大きな不安を感じた。それは将来、人間が考えることを対話型 AI が代わりに行ってしまうようになるという可能性だ。

人間は問題や欲求を解決するために、自らの知識を用いて解決策を考え、実行するという過程を行う。この一連の過程の中で現在、すでに知識は自らのものではなく、インターネット上にある情報や、対話型 AI の回答によって補う場合が多い。そこで、解決策を考えることさえも AI が代わりに行ってしまったらどうだろうか。

メリットは、この方が圧倒的に楽であるということだ。問題や欲求が発生したら対話型 AI に相談するという簡単な作業に変えるわけだから、人間はさらに楽に生きていけるようになる。また、対話型 AI の情報が正確であれば失敗する可能性が下がるため、より確実に問題や欲求を解決できるようになる。

デメリットは、考えが似てしまう、あるいは同じになってしまうということだ。対話型 AI には個体差がないため、同じような質問には同じような回答をだすことになる。つまり、違う人間が同じ対話型 AI に相談した場合、もっと良い考えがあるかもしれないが、その考えしか存在しないためそこから発展することがない。また、個体差がない対話型 AI に考えることを任せるため、人間の個性が薄くなってしまいうことにも繋がる。

これらを踏まえて僕はデメリットの方が大きいと感じた。生活は今よりも圧倒的に楽になるが、対話型 AI に考えることを任せ、その助言通りに行動するのは、人間が対話型 AI を使っているというより、人が対話型 AI に使われているようなもので、そんな人間は本質的に空っぽで、人間としての尊厳を失うように思えた。

今のまま対話型 AI が成長すれば、残念ながらこのような未来が実現する可能性は高いと思う。しかし、対話型 AI の開発を中止するという解決策は非常に極端である。そこで僕は、人間が考える楽しさを知ることができれば、考えることを省かなくなり、この問題を解決できるのではないかと考えた。具体的な案として、自分で作文を書いたり、数学の問題を解いたり、将棋をさしたり、サッカーやバスケットをしたりするなど、自分で考えて、実行するという過程を行えることを楽しむことを提案する。これらの行動は考える力を育み、考える楽しさを思い出させる。どれも重要なのは自分で考えるということである。対話型 AI に作文を書かせても意味がない。自分でテーマを考えて、自分で言葉を選んでこそ意味がある。新たに物事を始めるというのは非常に難しいことであるが、日常の中から考える楽しさを忘れないために行動に移してほしい。

現在、人類に急速に進化している。しかし、個々の人間としては、ゆっくり退化しているかもしれない。およそ 350 年前に亡くなったフランスの学者、ブレイス・パスカルは「人間は考える葦である」という

言葉を残した。人間は宇宙の中では葦のように小さく、弱い生物だが、考えることによって宇宙も超えることができる。僕は宇宙を超えたい。人間に宇宙を超えてほしいと願っている。僕は対話型 AI を使わないでほしいと言いたいわけではない。僕はただ、人間に考える葦であり続けて欲しいのだ。